第 13 回日本臨床検査学教育学会学術大会　　臨床検査学教育 Vol.11, No.1 p.70～72, 2019.

シンポジウム I：それぞれの主張、臨床検査学教育の可能性を探る

# 3. 現在の臨床検査技師教育体制における専門学校の役割とあり方

山　藤　　賢*

［要　旨］ 現在、臨床検査技師教育には、専門学校・短大・大学と様々な立場がある。第 13 回日本臨床検査学教育学会学術大会において、「それぞれの主張、臨床検査学教育の可能性を探る―短大・専門学校・大学（私立・国立）の果たす役割と連携そして企業ニーズ―」というシンポジウムが開催された。今回の学会テーマは「多様性の創成 ： 進化する臨床検査技師教育―教育と学びの神髄を探る―」であり、当シンポジウムでは、それぞれの教育機関の役割についてという共通テーマで講演が行われた。その中で、私は依頼を受けて、専門学校教育の役割と今後の可能性について、本校の教育内容も含めながら講演させていただいた。多様性が求められる時代においてのベースとなる医療人教育、自律教育、専門学校の特性など多岐に渡った話になったその内容についての抜粋を報告させていただく。

［キーワード］ 臨床検査技師専門学校教育、自律教育、昭和医療技術専門学校

## はじめに

現在、臨床検査技師教育には、専門学校・短大・大学と様々な立場がある。今回の学会テーマは多様性の創成であり、当シンポジウムでは、それぞれの教育機関の役割についてという共通テーマで講演が行われた。その中で、私は専門学校教育の役割と今後の可能性について、本校（昭和医療技術専門学校）の教育内容も含めながら講演させていただいたので、その内容についての抜粋を報告させていただく。

## I. 現在の各専門学校における戦略と連携

当初、大会長からいただいた仮の演題名は「専門学校の生き残り戦略と他教育機関との連携から生まれるもの（仮）」であった。そこで、まずは専門学校各校に「そもそも生き残れると思っているのか？」「他教育機関との連携はどのようなものがあるのか？」という問いを投げてみた。様々な意見をいただいたが、生き残りは難しいという意見の理由には、「少子化」「大学志向」「地域制」「就職先」「新設校の乱立」「業界自体の質の低下」などの問題が挙げられていた。また、生き残る可能性はあるという回答の理由には「特化した専門性の教育」「きめ細かい手厚い教育」「既卒生の受け入れ」「年限、学費などの家庭事情」「現場から専門学校卒業生を求められている実態」などが挙げられていた。

次に他校との連携だが、共通した連絡会や他校

*昭和医療技術専門学校学校長　sando@kj9.so-net.ne.jp

訪問、自校の中での他科との連携、臨床工学技士教育施設との関わり、などが挙がっていたが、特に連携は取っていないという回答が多かった。

他に専門学校の良いところとして、「学校間や教員同士の交流も多く、仲が良い」「歴史があり、一貫した哲学がある学校が多い」「教育協議会の成り立ちから始まり、多くの基盤となる歴史や法律、変革にも詳しく理解の深い先生方がたくさんいらっしゃる」という意見が挙がっていた。

これらの意見も踏まえた上で、一般的な専門学校の立場での話はもちろんであるが、今回は私の私的意見も含めて本校で行っている実践教育を検証しつつ、今後のあり方を考えてみることとし、タイトルも「現在の臨床検査技師教育体制における専門学校の役割とあり方」に変更させていただいた。

## II. 臨床検査技師は医療人であるのか

ここからは私的な意見になるが、講演の冒頭に、「臨床検査技師は医療人であるのか」という問いから始めさせていただいた。これは臨床検査技師の業務や役割、教育の方向性において多様性という言葉が多く用いられているが、そもそものベースの部分が必要であろうという考えからの問いである。それがなければ多様性という言葉に乗っかっただけの科学者、研究者、教育者などになってしまい、医療人としての土台がなくなってしまう。そう述べる私自身の立場は、現在、医療法人の理事長として複数の医療機関を経営している雇用者としての立場、また養成校の学校長としては教育者の立場、そして医師としては一緒に働く仲間としての立場があり、それぞれの立場から社会で必要とされる医療人について考えている。それらの観点から、本校の臨床検査技師教育の基盤は、「医療の現場で活躍できる、医療の現場で必要とされる医療人の育成」であると考えている。臨地実習なども含めて、そのようなベースを元に、臨床検査技師の多様性という部分には、全て乗っかってくるべきと考える。

## III. 医療人として必要な資質について

医療人には様々な資質が必要であるが、講演の中で、私は、医療人に必要な要素の中で何が一番必要かと問われたら、本質的には「感性」であると思っていると述べた。知識、技術はもちろん必要であり、それはどんな職種でも同様である。しかし、医療の現場で活躍する、人の命に関わり、支える医療人は、特別な存在であると考えている。その志とは別に、人に関わる感性があるかないか、そこが医療人としての資質を分ける最大の部分と思っている。言葉ではなくても、相手の心や、場の空気を読む力、「察する力」が医療人には必須と考える。それゆえに「人の心に寄り添う」という事を大事に考え、本校における教育の真ん中に据えている。これは、現在のチーム医療という概念の中では、なおさら必要となってくる考えだと思っている。あとは、どんな状況を前にしても、そこに立ち続ける力、講演では「いる力」と表現したが、これも大変重要である。この力は、体力的な事も精神的な事も含めてである。医療の現場では、そこにいる力がなければ、知識も技術も役に立たない。この「感性」と「いる力」の2つの要素を持ってして、臨床検査技師は医療人の一員として胸を張れる存在となる。その土台として、本校では自分を律することのできる、自律教育の観点を大事にしている。自発的に物事を肯定的に行える力をつけること、またその先にある自立した社会人、医療人となるべく、挨拶や早朝の掃除、礼儀などから始まり、日本語表現法などの特徴ある講義、人間学・生命の倫理などの命に寄り添ったような講義やワーク、また1年次のディズニーランドでの接遇研修、2年次の台湾研修旅行、そして3年次の富士山麓でのキャンプなど、学業以外でも多くの積み重ねを経験させている。そして3年次の6ヵ月に及ぶ臨地実習は、その「感性」と「いる力」を磨くまさに絶好の機会であり、そのような経験を経た学生が医療人としてのベースを持ち、国家試験に臨み、資格を取得していくという流れである。

## おわりに

臨床検査技師という医療人は資格業である以上、誰もがなれる仕事ではない。必要な単位と実践、国家資格を経て、初めて医療の現場に立てる。そのような観点から考えるに、まずは、医療人であるという担保が必要であり、その上での多様性という考え方を持つべきであろう。あらためて考えるに、そのような医療人教育の真ん中の部分は、現在の臨床検査技師教育体制の中では、専門学校、短大、大学の内、指定規則ということも含めて専門学校が一番くくりとしては担っている。大学、承認校というシステムが取りざたされるが、専門学校は、全て指定校であり、そこに入学してくる学生は全て臨床検査技師の資格を取ることを目的にしている。わかりやすく言えば、大学、短大の卒業生の中には、国家資格を得なくてもかまわない学生もいるかもしれないが、専門学校の教育体制の中ではそれはなく、臨床検査技師になることを目的にした学生しかいない。だからこそ、医療人教育に特化した内容をより濃く、自由に設定できる。しかしそれは、規則に縛られたもの、医学教育に特化したものという意味ではない。コアな教育部分を担保しつつ、より広く深い医療人教育を出来る環境にあるということである。専門学校のいいところは、指定校である中で、自由という名の元に悪いことをしようと思ってもその制度上『出来ない』ところにある。なんでもできるということが、自由と多様性ではない、太い軸があるからこそ、多様性は生まれる。私は、専門学校を代表して何かを言える立場には全くないが、講演当日は、以上のような本校における実践教育も含めて、私的な意見を述べさせていただいた。もちろん、我々には足りないところが多々あり、これからも皆様からのご指導をいただきながら、より質の高い、未来に向かって活躍できる、キラキラとした目の医療人を輩出していきたいと思っている。